

乙第

242

号証

9 /

特ダ第 104 - 23 号

平成20年10月14日

国土交通省関東地方整備局長

菊川 滋 様

群馬県知事 大澤 正



八ッ場ダム建設事業について（照会）

本県の河川行政の推進につきましては、日頃から種々の御配意を賜り感謝いたします。

さて、本県におきましては、八ッ場ダム建設事業に関し、群馬県知事外1名を被告とした公金支出差止等請求住民訴訟事件（前橋地裁平成16年（行ウ）第43号）が提起され、現在前橋地方裁判所で審理中です。

当該訴訟事件の争点は、群馬県知事による八ッ場ダム建設事業に対する負担金の支出等に財務会計法規上の義務違反があるか否かですが、その根拠の一つとして、原告らは、八ッ場ダムのダムサイト地盤の調査や評価等が不適切であるため、八ッ場ダムは施設自体の安全性を欠くと主張しています。

つきましては、別紙記載の坂巻幸雄氏の意見書及び証言に関する主張の要旨について、貴職のご意見を確認させて頂きたく照会します。

1 ダムサイト岩盤の脆弱性、危険性について（意見書2～9ページ）

(1) ダムサイトの継続的な調査について

国土交通省は、ダムサイトの調査、検討内容について、今後も継続し実施される地質調査や設計作業による精度向上が図られ、ダムサイトの評価や図面に修正が加えられていくとしているが、これは、いまだにダム岩盤について不明点が残されており、ダム建設を進める過程で設計変更はありうることを暗示しており、現時点での評価が今後変わりうることを国土交通省自体も認めているものである。

(2) 基礎岩盤の評価・岩級区分について

ハツ場ダムのダムサイト岩盤中には、多くの割れ目が存在し、ダムの安全性や今後の施工上大きな課題となるが、国土交通省は、割れ目の存在をあえて無視または軽視した岩級区分を行っている。

国土交通省が作成したルジオンマップと岩級区分図を比較すると、高ルジオン値の箇所も岩級区分図ではCH級、B級に評価されている箇所が見つかるが、ルジオン値が大きい箇所は割れ目の存在等を示唆するものであり、このような箇所の岩級区分のランクが低くなるものである。

また、高ルジオン値の分布から低角度の割れ目帯が認められるが、岩級区分図ではこれらに対する考察がほとんどなく、意図的に改ざんしており、このような岩級区分図をもとにした地盤改良計画は信用できない。

なお、良好なダム基盤(岩盤)とは1ルジオン以下が望ましいとされており、20から30ルジオン以上の部分では十分な改良は困難であり、基礎には不適當であるといわれている。

(3) 左岸山裾部のCL級岩盤について

国土交通省は、擾乱帯と呼ばれていた左岸山裾部区間の岩盤強度について、横坑調査の結果から岩級区分をCL級からCM級に見直しているが、この見直しには以下のような疑問があり、調査も不十分である。

- ①CM級とCL級での強度試験ではその結果に明瞭な差が現れるとは考えにくい。
- ②横坑の観察ではCM級であったとしても、ボーリング調査ではCL級であることはあり得る。
- ③既往調査から見れば、断層(破碎)帯の要件を十分備えている。
- ④1本のボーリングデータだけで、擾乱帯のダムサイト直下への延長を否定している。
- ⑤擾乱帯の西側の断層線については何の解説もせず、ダムサイト岩盤は堅硬としている。

また、ダムサイト左岸側の高透水帯とこれら断層(擾乱帯)のとの関係をあきらかにすることが極めて重要であるが、なぜかこの点についても触れていない。

(4) 右岸上流部の熱水変質帯について

国土交通省は、右岸上流部の熱水変質帯は下流のダムサイト中心部には延びていないと説明しているが、打越造成、JRトンネル、道路建設による調査に伴い、新たな熱水変質帯が広く分布することが明らかになっている。このように、ダムサイト両岸に分布する熱水変質帯の分布を見ると、ダムサイトに熱水変質帯が延びてきていると見るべきである。

また、右岸横坑の枝坑での変質帯は坑内7m地点で収束するとしているが、これは、枝坑と変質帯の交差部を見ているだけであり、また、枝坑6m付近では変質帯が途切れており、ここで、新たな亀裂に乗り換えたと思われることから、変質帯はさらに上方に延長しているとも判断できる。

一般に、水・岩石比が大きい(水の量が多い、すなわち水循環が起きている)ところでは、変質の進行が早くなると言われており、ダムに湛水すれば、水圧により岩盤中の亀裂の地下水は移動し、変質化作用が加速されることになる。すなわち、現時点で未変質とみえている個所においても、やがて変質帯に変化・拡大する可能性があるが、国土交通省は、このような変質帯

が拡大することについては触れていない。

本来このような変質帯にダムを建設すること自体が誤りであり、ダム保安上極めて問題のある工事となるのである。

2 ダム基礎岩盤の高透水性について（意見書9～11ページ）

(1) 国土交通省は、ダム高が最も高くなる（水深が最大となる）河床付近の基礎地盤ではルジオン値は小さく、難透水層であるとしているが、右岸の河床標高以深でも40を越えるルジオン値が分布しているなど、ルジオン値が高い傾向が認められる。左岸についても河床標高以深で高い値のルジオン値(10を超える)が分布しており、「河床付近の基礎地盤ではルジオン値は小さい。すなわち難透水層である。」と断定するのは誤りである。

(2) 左岸山側には地山から河床標高に達するボーリング調査データはほとんど存在していないが、ルジオンマップで示されている河床部付近の高透水帯については、より山側で所定深度までのボーリング掘削により確認する必要がある。水平割れ目が発達していることから、割れ目はさらに山側に延びている可能性が高く、したがって、高ルジオン値の分布もさらに広がる可能性がある。この点において、ダム軸付近に示されているルジオンマップの高透水帯の分布の判定には誤りがある。

(3) 河床標高以深はルジオン値が小さいという主張にはもうひとつ誤りがある。ルジオン試験においては、調査する岩盤の性質から、限界圧あり型、限界圧なし型、昇圧しない型等に分類されるが、限界圧あり型や昇圧しない型は、本来ダム基礎岩盤中であってはいけないものである。

しかし、国土交通省が作成したルジオンマップをみると、河床標高以深にこの限界圧あり型を示す箇所がかなりの地点で見られ、限界圧を示す部分では、ダム完成後の満水時には、亀裂破壊が起きることを物語っている。

3 グラウチング技術指針について（意見書 11～12 ページ）

国土交通省は、原告の高ルジオン地帯でのダム建設は不適であるとする主張に対して、旧グラウチング技術指針に基づく判断であるからと退け、新グラウチング技術指針に基づけば、建設可能としているのである。

この新基準は、ダム建設費大幅見直しの時期にあわせて作成された、国土交通省による国土交通省のためのお手盛り基準と言わざるを得ない。

4 ダムサイト下流の断層について（意見書 12 ページ）

ダムサイト下流見晴台の南西左岸（その後坂巻氏は、証人尋問において、意見書では南西と記述していたのは、北東の誤りであると訂正している）の河床に見られる断層について、昭和45年の資料を除き、どの報告も触れておらず、国土交通省はこの事実を無視している。この断層は、ダムサイト地域の貫入岩帯や小断層の方向が河道方向と並行しており、この断層とも無縁でないと考えられ、この地域の不連続面の形成過程を考える上でこの断層露頭は避けてはならないにもかかわらず、調査されていない。これら擾乱帯・断層を含む割れ目の分布・構造を検討することなく、遮水工法で対応し安全が保障されるとするのは危険である。

(別添参考文書)

- ・意見書「ハツ場ダムサイトの地盤の安定性について」坂巻幸雄
- ・証人調書（平成20年9月5日） 坂巻幸雄
- ・証人尋問で使用了したスライド